第二十六話　スタジオ夜話（番外編）

サウンドドラマの制作⑰

☆はじめに

GW は良い天気に恵まれ読者諸先輩の皆様も少しは休息が取れたのではと思っています。スタジオ夜話（番外編）今回は前回の台詞のマイクロフォン収録についてのおさらいを兼ねながら話を進めていきます。

「台詞収録でのマイクロフォンセッティング」Ⅰ

前回いくつかのマイクロフォンセッティングを紹介しました。（写真 1）を見て下さい。基本的なステレオでの台詞収録でのセッティングです。マイク番号 1 と 2 がＬとＲの設定でこちら側（出演者側）に向いています。指向性はどちらも単一指向性です。マイクロフォン間隔はシュチエーションの設定によって変化しますが最初は概ね 40cm ぐらいにしておきます。また登場人物が 2 人以上になった場合はマイクロフォンの指向性設定を双指向性に切り替えて（写真 2）出演者どうしが向かい合うようにマイクロフォンを使うことが良いように思います。

このとき向かい合う役者さんへの指示が右左逆になるので役者さんへのマイクワーク指示は右左ではなくマイク番号で指示するように心がけて下さい。また 2 本のマイクロフォンは表裏を間違えないようにセッティングしてください。

「台詞収録でのマイクロフォンセッティング」Ⅱ

（写真 3）はステレオでの台詞収録にセンター定位用マイクロフォンを追加した例です。2 本でのセッティングに対してセンター定位がしっかりとしています。

LR2 本のマイクロフォンはステレオでの空間表現的な利用法へと変化します。中心になる登場人物の台詞をセンターマイクロフォンを主として収録すると、他の登場人物の台詞を様々な距離感を持ってステレオ空間に定位させることが容易になります。3 本のマイクロフォンのセッティングを工夫しましょう。出演者のマイクワークも大切ですがエンジニアによるパンポット設定などもその空間性

写真 1　マイクロフォンセッティング

写真 2　指向性設定を双指向性に切り替える

写真 3　ステレオでの台詞収録にセンター定位用マイクロフォンを追加した例

写真４　調整室での定位ポジション、アドレスを確認しながら収録作業を心がける

写真５　すこし高めの位置でセッティング

写真６　1m 強位のやや低めにセッティングする

や定位感に大いに期待できます。センターマイクロフォンが加わるとステレオ再生音場でかなり定位感がハッキリとしてきます。調整室での定位ポジション、アドレスを確認しながら収録作業を心がけましょう。（写真４）

「台詞収録でのマイクロフォンセッティング」Ⅲ

自然なステレオ空間には MS マイクロフォンによる収録が有効です。と前回お話しました。音楽の収録、自然環境での空間音の収録などには非常に適した選択肢ですが、サウンドドラマの台詞収録では MS マイクロフォンのみの収録はお勧めしません。

MS マイクロフォンは確かに自然なステレオ感でその空間を捉えるのですが、台詞などの輪郭、明瞭度、定位感などに若干の曖昧さがあります。そこで MS マイクロフォンは前のセンターマイクロフォンや LR2 本のマイクロフォンとの併用をお勧めしますステレオでの自然な空間性と台詞の明瞭度定位感を実感できます。もちろんエンジニアの MS ディレクション設定に期待することはいうまでもありません。今回の MS マイクロフォンは小型なケースに２つのマイクユニットを収めたオーディオテクニカ製を出演者に対して若干高めの位置で収録する設定でセッティングしています。（写真５）

「ダミーヘッドの利用もあり？！」

ダミーヘッドマイクロフォンはバイノーラル試聴を前提としたマイクロフォンです。ヘッドフォン試聴での頭外定位には定評があります。通常のスピーカーによるステレオ試聴でも定位感は曖昧になりますが表現する空間には独特の広がり感があることも事実です。前にお話した MS マイクロフォンの代わりに利用すればまたちがった空間を表現できます。もしヘッドフォン試聴すれば興味ある表現になっているはずです。スタジオでの台詞収録にあたっては若干低めにセッティングするのが筆者の経験上有効です。1m 強ぐらいです。（写真６）筆者はこれまでに何度も利用して楽しんできました。一度お試しあれ！

「サラウンド収録はスタッフ間の相互理解が不可欠！」

5.1 サラウンドでの台詞収録は経験的にステレオ収録と基本的に同じです。大きく異なる点はリアースピーカーを意識した収録を心がける点です。前にサウンドドラマの聴かれかたを意識してというお話をしましたが、まさに 5.1 サラウンドではそれが重要な要素

となります。リスナーの後方にも音がある。サウンドドラマのシュチエーション設定での最重要課題です。作家や演出家の想像を具体的な音再生空間で実現する作業プランがここにあります。登場人物の台詞位置（定位位置）やその環境での背景音、等々、ON/OFFの設定も大きく変ります。例えば主人公Aがリスナー正面で台詞という設定、通常のステレオでは主人公Aに対してOFFの台詞は距離感のあるOFFマイクロフォン収録の台詞を主人公Aの定位位置とは異なった位置に定位させます。5.1サラウンドでも同様の設定は当然可能ですが、ONマイクロフォン収録の登場人物Bの台詞をたとえばリアースピーカーLchから出すとリスナーは主人公Aに対してBは離れた位置にいると認識します。ONマイクロフォンの音源でも設定上のOFFを創ることが可能になってきます。これは一例ですが台詞収録にあたってサラウンドではドラマシュチエーションの設定そのものをスタッフ間で検討する必要が生じます。お互いの専門領域を理解しながら目標を達成しましょう。スタジオでの具体的マイクロフォンセッティングではステレオ収録のマイクロフォンセッティングを基本に時にはMSマイクロフォンに代えてサラウンドマイクロフォンを併用（写真7）小型の扱い易いものが良い。筆者はフォロフォンMINIを使うことが多かった。スタジオ内で簡易モニターもヘッドフォンで可能であり、正面方向に対してプラスαのマイクロフォンを使用することや正面方向に対してのZoom機能など利用できるオプションが時として便利です。またサラウンドでは左右、後方での定位感は正面方向に比較してかなり曖昧になるので正面LR、後方LRの４本のマイクロフォンを用意して台詞のサラウンド収録をしています。（写真８）このマイクロフォン設定では役者さんのマイクロフォンワークが重要で毎回リハーサル時に動きを十分に検討して収録にあたりました。

次回は今回に続き台詞収録時のマイクロフォンセッティング、具体的なマイクロフォンワークなどのお話をします。またサラウンドドラマでの空間設定についてもお話したいと思います。今回スタジオでのマイクロフォンセッティングは日本大学芸術学部放送学科、茅原良平講師のご協力により行われました。次回は茅原先生の解説も併せてお話しします。

使用マイクロフォン：
TML170、ダミーヘッド（ノイマン社）MSマイクロフォン（オーディオテクニカ社）
フォロフォンMINI（フォロフォン社）

― 森田　雅行 ―

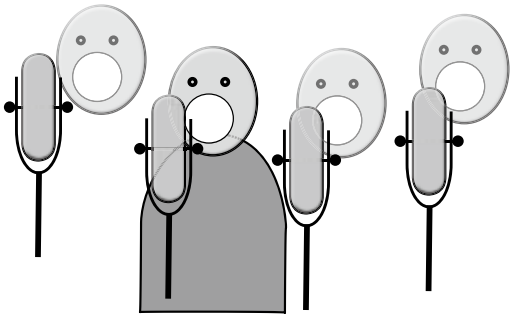

写真７　サラウンドマイクロフォン、フォロフォンMINI

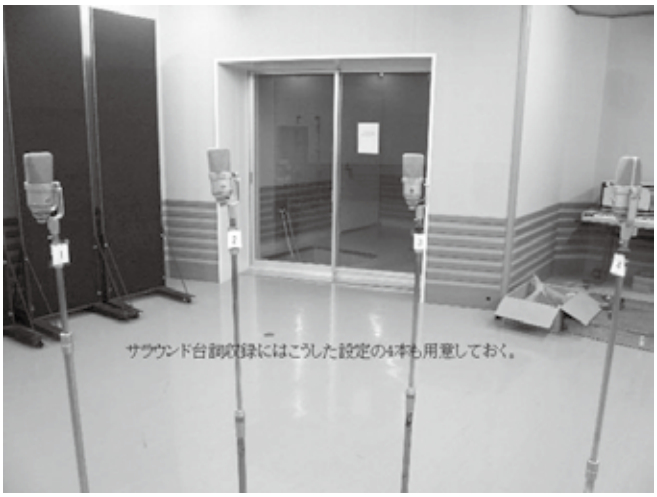

写真８　正面LR、後方LRの４本のマイクロフォンでサラウンド収録